

# 幼児教育における自然体験と保育者の資質

## — 保育者養成機関における環境教育の視点から —

前田正紀

(2009年1月30日受理)

### 1、はじめに

2008年1月1日をもって京都議定書第一約束期間に入った。2012年までの5年間で基準年(1990年)の排出量から6%を減ずるという、我が国に割り当てられた温室効果ガス排出量の削減目標を達成するための本格的な取り組みが始動している。内閣の京都議定書目標達成計画では、国、地方公共団体、事業者、国民のそれぞれについて基本的役割が定められているが、この計画をもとに「1人1日1kgのCO<sub>2</sub>削減」をモットーとするキャンペーン等も展開されている。

こうした計画の発動に先立ち、教育現場でも、環境保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律に基づき、地球温暖化問題の重要性の周知と温暖化防止の行動を習慣化していく取り組みが推進されてきた。あわせて、2005年から開始された「国連持続可能な開発のための教育10年」の趣旨を踏まえた環境保全活動を含む環境教育も進められている。

### 2、幼児期の環境教育

学校における地球規模の環境保全を目指す教育(以下環境教育とする)の基本的な考え方は、環境教育指導資料(文部省、以下指導資料とする)に示されている。その中で、環境教育は、「幼児から高齢者までのあらゆる年齢層に対してそれぞれの段階に応じて体系的に行われなければならない。」と位置づけられ、特に次代を担う幼児児童生徒については、「人間と環境のかかわりについての関心と理解を深めるための自然体験と生活体

験などの積み重ねが重要である。」として、自然との触れあいの機会を多くもたせる活動の重要性が強調されている。

今日の環境問題が、豊かで快適な生活を追求してきた結果としての消費の拡大によるものとするれば、幼児といえども消費者としてその原因の一端を担うものであり、無駄を省き、物を大切にすして資源の再利用に努めていくという生活体験の実践は、まさに京都議定書目標達成計画に合致した取り組みといえる。しかし、こうした消費者としての好ましい生活習慣を身に付ける学習活動だけで、幼児期の環境教育がその役割を果たしているとは思えない。

今日の環境問題の深刻さを示す指標として、温室効果ガスの蓄積以外に生物種の絶滅がある。40億年以前にまでも遡れるという生命の歴史の中で、生物種の大規模な絶滅は幾たびかあったと推測されているが、今日の絶滅は、その速度においてこれまでに例のないものだという。現存する地球上の生物種は共通の祖先から派生し、長い年月をかけて多種多様な生物種に進化してきた。この間、生物はそれぞれの生物種ごとに個別に存えてきたわけではなく、大気、水、土壌などの無機的要素をも含めて、生態系という一つのシステムの中で相互にかかわりあいながら互いを維持してきたのである。食物が得られるのも、病気になったり回復したりするのも、排出物や遺骸が分解されて再び利用可能な状態に戻るのも、すべて生物間に網目のように張りめぐらされた相互依存的なつながりによるものである。地球上の生命体は、いわば多種多様な生物種で構成された一つの生命共

同体にもたとえられる。ある生物種が絶滅するという事は、共同体の一員としてその生物種が担ってきた機能が失われ、共同体としての活力が低下することにつながる。生物種の個体数が限度以下になったとき、その生物種の絶滅が不可避な現実となる例を我々はこれまでに幾たびも見てきた。これと同じ状況が、個々の生物種とそれらによって構成されている共同体との関係においても当てはまるであろうことは想像に難くない。

今日の地球生命体が遭遇しつつある破滅的状況を回避するためには、自然を人と対立する存在としてとらえ、それと戦い支配していくというこれまでの人間中心的な自然観や生命観から脱却する必要がある。この場合、そうした取り組みを根底で支えてくれるものは、自らを自然ないしは生命共同体の一部であるとの認識のもとに、自然を畏敬しいのちあるものを慈しむ心情、ヒトという生物種が古来維持してきたはずの豊かな感性ではないだろうか。自然と調和していく感受性を育て伝えていく取り組みが、これまで以上の必然性をもって求められているように思われる。

省資源、省エネルギーを通して温室効果ガス排出量の削減を目指す行動は、京都議定書、さらには1992年のリオ・サミットにおいて採択された気候変動枠組条約を起点とする流れであるが、このサミットにおいては今一つの重要な条約、生物多様性条約が採択されている。生物の種類に特別な枠を設けることなく全体を包括的に保全しようとするこの条約の趣旨は、自然ないしは生命観についての心情的な面からの改革が伴わない限り恒久的な対策も構築できないとする、今日の環境問題に欠かせない意識改革の起点となるものである。指導資料において、生活体験とあわせて自然体験を重視する指摘があることは先述したとおりであるが、こうした指摘は生物多様性の保全と一体をなすもので、幼稚園教育要領や保育所保育指針（以下教育要領等とする）に示されている「自然などの身近な事象への興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにすること。」という目標の意図とも合致し、自然体験を幼児期における環境教育の支柱とする根拠になるものといえる。

### 3、保育者養成機関での取り組み

教育要領等によれば、身近な環境とのかかわりは領域「環境」（以下「環境」とする）において取り扱うこととされている。「環境」と環境教育が直接結びつくものではないが、身近な環境に親しみ自然と触れ合う中でさまざまな事象に興味や関心をもつように導く「環境」のねらいは、環境教育と密接なかかわりをもつことになる。教育要領等では「環境」で取り扱う内容がいくつかの項目に分かれて示されているが、特に、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」という内容は、「環境」と環境教育とが直接重なりあっている部分である。

保育者養成機関の授業においてこうした内容がどのように取り扱われているかを知るため、手元にある保育内容研究Ⅲ（環境）の学生向けテキスト（4出版社）をみると、「植物・動物とふれあう活動」、「生きもののかかわりにおける子どもの育ち」、「自然に親しみ、植物や生きものに触れる」、「動物（植物）を中心とした環境」などの項目名で取り上げられていることがわかる。具体的には、教材として利用度の高い生物種名や生物と触れ合う場所、遊び方などについての情報、飼育や栽培の方法、教材として利用した場合の指導事例などが示され、幼稚園や保育所の日常活動として取り上げることが容易で、実践されることが望ましい事柄を紹介し解説する内容となっている。こうした内容をどのように展開するかは授業担当者に委ねられることになるが、植物の栽培や動物の飼育など、特に生物の生活を通して豊かな感性を育てる内容については、子どもたちと同様、学生自身も可能な限り実物に接し、自らの五感を通して感得しておく必要がある。

本学においては、幼稚園教諭の免許および保育士資格の取得に当たり、「保育内容Ⅲ（環境）」（1単位）は必修とされ、隔週、前・後期にわたり通年履修させている。この中で、前期においては、特に生物にかかわる内容として以下のような事項を取り上げている。

- ・植物にかかわる力を育てる活動（1）

授業時間中に隣接する河川敷に出かけ、野草を観察して植物名を調べる。後日、野草 10 種類について 1) 花や茎・葉などのスケッチ。2) 当該野草を利用した遊び方の工夫。3) 当該野草についての興味ある話題。以上の 3 点について記述したレポートを提出する。

#### ・植物にかかわる力を育てる活動 (2)

一人一鉢、種子から再び種子を収穫するまで、学内の自然園で草花を栽培して観察する。栽培する植物種は学生自身の考えで選択する。種蒔きまでの作業には授業時間を当てるが、その他の活動はすべて時間外に行う。レポートは、1) 成長の全過程の記録。2) 当該植物を子どもたちと一緒に育てているとの想定のもと、発芽や開花などの節目における子どもの反応やそれらに対する指導者（この場合は学生）としての対応の仕方を考察し記録する。3) 栽培の過程で工夫した事項、の 3 点について記述し提出する。この課題の終了は、天候や植物種による生育期間の違いにもよるが、例年夏期休業期間を越えて後期にまで持ち越されることになる。

#### ・動物にかかわる力を育てる (1)

夏期休業期間中の課題として実施する。前期の終了前に、あらかじめ動物界全般についての解説を終えておき、1) 観察した昆虫 10 種のスケッチ。2) 当該昆虫を観察した場所や時刻などの生息環境の記録。3) 当該昆虫と人とのかわりについて、の 3 点についてレポートにまとめ、休業期間終了後に提出する。

生物に関するこうした学習においては、特に次の 2 点に留意している。1 点目は生物の呼称についてである。生物と親しく接するためには名前と呼ぶことがポイントであることは、人間関係の場合と同様である。幼児の場合、略称を使用すればよいのであるが、小学校以後のことを考えれば、できれば種名もしくはそれに近い呼び方（属名、科名）で呼ぶことが望ましく、指導者としてはそうした面からもある程度の知識をもつことが望まれる。そのために、「草花」や「虫」の観察課題では、最初のステップとして 10 種類という数を要求しているのである。

2 点目は生物を育てることについてである。生

命現象に特有の性質は成長し増殖することであり、このことは飼育・栽培の過程を観察することで確かめられる。よく言われるように、「育てることによって自ら（子ども）も育つ」のである。こうした活動を通して「死」とも遭遇することになり、いのちの尊さを体験を通して学ぶことになる。したがって、栽培や飼育についても、ある程度の知識や技術の習得が望まれるのである。

なお、提出されたレポートについては、個別の評価以外に授業でも取り上げ、全体場で講評を加え参考に供するようにしている。

以上、前期において 3 点の提出課題を含む観察体験学習を実施していることから、次に紹介するアンケートの調査結果は、こうした授業の効果を評価する資料にもなっている。

## 4、生物に対する学生の好感度

生物に対する豊かな心情を育てるためには、子どもたちと行動を共にし、感動を共有する保育者の存在が不可欠である。特に、幼児にとって未知の存在である草花や虫に対する保育者の対応は、生涯にわたって保持される子どもたちの心情の基盤ともなるもので、その影響力は極めて大きい。したがって、保育者の生物に対する心情のあり方は決して私的なものではなく、職業的な資質として重要な役割を果たすことになる。

こうした観点から、動植物に対する保育者ないしは保育者志願者の心情がどのような状態にあるものかかねてより関心をもっていたが、今回こうしたことを推測する手掛かりとして、本学の幼児教育学科に学ぶ学生の協力をえて、彼女らの動植物に対する好き嫌いの感情（以下好感度とする）についてアンケート調査を行うことができた。この調査は 2008 年 10 月、後期の授業開始直後に行ない、幼児教育学科 1 回生 148 名から回答を得ることができた。調査項目と設問ごとの回答数は文末に示す。

### 4-1 アンケートの内容とねらい

動植物に対する心情を、好きか嫌いかという感情に着目して、「好感をもつ」、「好感をもつほどではない」、「嫌悪感あり」の 3 段階に分けて回答

を求めた。これは、こうした3段階の心情の違いが、多くの場合、動植物に対する対応の仕方を決めるに際し、その拠り所になるのではないかと考えたからである。

好感度の対象とした動植物は、植物では路傍や河川敷などに自生する野生の草花（以下「草花」とする）とし、動物では獣や鳥、魚、貝類などを除き、身近に生息す昆虫類を中心とするいわゆる虫（以下「虫」とする）に限った。その理由は、こうした「草花」や「虫」は常に身近に接する存在であり、それらとのかかわりは日常的に生じているので、好き嫌いの感情も自らの体験を通して明確に意識されているのではないかと考えたからである。

「草花」や「虫」に対する好感度は、その種類によって異なるものであるが、この調査では、そうした個々の好き嫌いの感情を一括し、大局的に判断してもらうことにした。その理由は、動植物に対する反応は、多くの場合大局的ないしは直感的な感情に影響されることが多いと思われ、保育者としての資質を考える上でも、そうした大局的な視点が重視されるべきではないかと考えたからである。しかし、特に「虫」に関しては、好き嫌いのいずれとも判断しかねるとするものが「好感をもつほどではない」とする選択肢の中に相当数含まれてきたものと思われる。また、「その他」の選択肢を選んだ回答の中にも、動植物の種類によって異なると明記したものが、若干ながら含まれていた。

このアンケートのねらいを以下の3点で示す。

1点目は生物に対する学生の好感度を、幼児教育学科入学前の時点と、本学で1回生前期の授業を終了した時点とで比較することである（問1、2および問6、7）。こうした方法で、本学における学習が学生に対する好感度に及ぼす影響を探ることができれば、その結果を授業改善の参考資料としても利用できるのではないかと考えたからである。

2点目は自然体験などの生物を扱う学習に対する学生の意欲がどのような状態にあるのか（問3、8）、あわせて、保育の現場において課題となる事項が何であるかを推測することである（問4、9）。

学生は、授業の一環として自然観察に出かけることを大いに歓迎するのであるが、こうした反応を、学習内容に対する関心の高さやその後の活動の動機付けにつながるものと解してよいものかどうか。また、自然体験活動が重視されながら、保育の現場において停滞し敬遠されがちな実態について、その理由や対応策を探る手掛かりが得られないものかと考えたからである。

3点目は生物、特に「虫」に対する好き嫌いの感情には大きな個人差がみられるが、こうした個人差が何に起因するのか。特に、学生自身、自らの心情が形成される過程において父母の影響をどの程度受けてきたのか知ることができれば、影響力においては保護者に優るとも劣らない保育者の資質を考える上でも、参考になるのではないかと考えたからである（問5および問10）。

#### 4-2 アンケートの結果にみる授業等の効果

入学前の段階で「草花」に好感をもつ学生は、全体のわずか17.6%を占めているにすぎない。この数値が、今日この年齢層の女子学生に共通したものであるかどうかは不明であるが、問題は、こうした心情を入学後の学習活動等でどの程度変更するかということである。前期終了後の10月の時点ではこの数値が66.2%となり、顕著に増加していることがわかる。こうした大幅な増加は、入学後のさまざまな学習活動や、保育者を志願する意識の形成と関連したものであることは、比較した2時点の間隔が短期間であることや、数値の変化が大きいことからみて異論のないところであろう。このことはまた、学生の「草花」に対する心情には嫌悪感が伴わず、比較的短期間での改善が可能であることも示している。

「虫」については、好感をもつとする回答が入学前の3.4%から12.2%に増加し、嫌悪感をもつ学生が60.1%から23.7%へと減少している。こうした結果も、「草花」の場合同様、学習による成果とみてよいだろう。ただし、好感をもつとする学生が前期終了時点においても10%を少々超える程度にとどまり、20%を超す学生が依然として嫌悪感を維持したままという実態については、「草花」とは異なる状況にあるものとして留

意しておかなければならない。

#### 4-3 保育現場における課題

問3と問8に対する回答、すなわち、現時点における「草花」や「虫」についての知識の習得状況から、今後の学習の必要性をどのように考えているかということであるが、知識を増やしたいとする回答が、「草花」を対象とする場合は74.3%を占めた。知識の習得を望まないとする回答者の真意は測り難いのであるが、卒業資格の取得とあわせて、幼稚園教諭の免許や保育士資格を取得するための過密なスケジュールが背景にあることを思えば、この数値は、意欲や関心面での学生の意識がむしろ高い状態にあることを示すものとみるべきであろう。

「虫」については40.5%の学生が学ぶ意欲を示している。この数値も、「虫」を感覚的に拒絶する者が多数を占める集団にあっては、よく頑張っている数値と思えなくもない。

問4と問9の回答から、保育の現場で課題となる事柄について考察してみると、知識や技術面での問題、すなわち、今後指導者となった時点での資質を向上させたいとする回答が、「草花」の場合は68.7%、「虫」の場合は49.7%を占めた。保育の現場で生物を扱う活動が敬遠される理由として、この種の活動には手間暇がかかることを予測していたのであるが、知識・技術面での力不足もプレーキ役を果たしている実態がみえているようである。自然、とりわけ生物を対象とした学習の場合、自学自習には多くの困難を伴うことから、養成機関等の学習プログラムにおいて体験を通じた学習機会を確保することの必要性を、こうした結果からも強調しておきたい。さらに、「虫」については、「虫」自体を嫌うことを理由としてあげている学生が3割近くもあることに注目しておかなければならない。

なお、問4と問9に関し、自らの資質面での改善を選択する回答が多かった理由として、調査時点においては幼稚園や保育所等での実習経験が少なく、現場の状況について学生の知識や経験が十分ではなかったという事情があることにも留意しておきたい。

#### 4-4 父母の好感度との相関

父母の心情が子どもに与える影響は極めて大きいと思われる。そこで、問5と問10では、「草花」や「虫」に対する学生と父母の好感度の相関をみようとしたものである。

「草花」の場合、父母（父母の一方または両親共の場合を含む）が「好き」とする回答が81名あり、全体の54.7%を占めた。残りの67名（45.3%）は選択肢の「その他」を選択しているが、その理由は父母の好みを承知していないというものである。そこで、父母が「好き」と回答した学生について、入学前後での好感度の変化をみると、19名（23.5%）から60名（74.1%）に増加しており、学生全体でみた26名（17.6%）から98名（66.2%）への増加と比較すると、百分率の数値で5.9%～7.9%高くなっている。

問10においては、特に「虫」に対する嫌悪感に着目した。父母が「虫」を「嫌う」とする回答が学生数で46名、全体の31.1%を占めている。「その他」を選択した学生は102名（68.9%）であるが、その理由のほとんどは、「草花」の場合と同様父母の好みを不明とするものである。父母が嫌悪感をもつとする学生について、入学前後における学生自身の嫌悪感の変化を百分率でみると、71.7%から28.3%に減少しており、学生全体でみられる60.1%から23.7%への減少と比較すると11.6%～4.6%高くなっている。

これらの結果は、子どもの生物に対する好き嫌いの感情の成立には父母の影響があることを示唆しているように思われる。ただし、今回の調査では、父母の生物に対する好感度を子ども（学生）の目を通じた間接的な判断に依ったこと。また、得られた数値については、親子の相関をどの程度示したものとといえるのか、調査方法を含めて検討する必要があるようである。

#### 5、おわりに

今日の地球環境問題に対する幼児教育での取り組みとしては、子どもたちが生物やそれらを育む自然に触れ、親しみ、いのちあるものを慈しむ豊かな心情を育てることが不可欠の要件であると考

える。そのためには、子どもたちに付き添い、自然に誘い、感動を共にする保育者の存在が欠かせない。その一方で、‘素手では土にさわれない’とか‘青虫を見ると体が硬直してしまう’とかいった学生の存在がある。こうした現状から、保育者を目指す学生の生物に対する心情がどのような状況にあるのか、また、そうした心情を学習活動等を通してどの程度改善しうるものなのか知る必要があることを痛感したことが、今回のアンケート調査を実施する直接の動機となった。

本学において保育者を目指す学生について、生物に対する好感度の状況を「草花」についてみた場合、入学前の段階で好感をもつ学生は全体の2割にも満たなかったものが、入学後にはこの数値が大幅に増加している。また、「虫」に関しては、大部分の学生が入学前には嫌悪感をもっていたものが、入学後にはこの数値にも減少傾向がみられる。こうした変化は、幼児教育学科入学後の専門科目等の学習が、心情面においても一定の成果を上げていることを示すものである。しかし、現状におけるこうした成果も、地球環境問題の深刻さを思えば、決して十分なものとはいえないだろう。そうした観点から、幼稚園教諭免許や保育士資格取得の際の必修科目である領域「環境」の授業内容・方法、指導計画上の位置づけなどについては、環境教育の視点を明確に踏まえた改善を加える必要があり、特に自然体験学習を重視する方向性を打ち出していく必要があると思われる。また、こうした問題提起の背景となっている地球環境問題は、年齢や世代を超えた取り組みを必要とするテーマでもあることから、少なくとも学校教育の段階においては、幼・小・中・高・大を一貫した教育課程上の整備が求められる。

本学ではFD委員会の主導で授業評価のアンケートが実施されており、学生の授業への取り組み方、授業の内容・方法、授業を通して得られた成果などについて、「強くそう思う」、「やや思う」、「あまり思わない」、「全く思わない」の4段階に

分け、4～1の評点を与えて数値化している。本授業については、前期の終了時点で、全学共通の設問以外に「この授業を通して生物への関心が増したか」という設問を追加して学生の感想を問うた。その結果は、平均値で3.24（規定の設問全体の平均値は3.23）という数値になったことについても記録にとどめておきたい。

なお、今回のアンケートは、2007年度に実施した予備調査をもとに、文言に若干の修正を加えて実施したものである。今回の結果を予備調査の結果と比較した場合、大筋では一致しているものの、設問によっては数値に少なくない差異が認められた。これは、学習集団による差異とも考えられることから、今後授業改善の資料としてこのアンケートを利用していく場合には、内容を分割して授業開始前の実態を把握し、学習集団の状況にあわせて授業を展開していく必要があるのではないかと考えている。

#### 参考文献等

- ・今村光章：「保育における環境教育の重要性」 仁愛女子短期大学研究紀要、29:1-10、(1997)
- ・井上美智子：「幼児期の環境教育普及にむけての課題の分析と展望」、環境教育 Vol.14-2:3-14、(2004)、
- ・前田正紀：「バケツで稲づくり」、福井陸水生物研究会報第14号、63-67、(2007)
- ・前田正紀：「環境教育と指導者の資質」、福井陸水生物研究会報、40-42、(2008)
- ・文部省：『幼稚園教育要領』、(1998)
- ・厚生省児童家庭局：『保育所保育指針』、(2000)・文部省：『環境教育指導資料（小学校編）』、(1999)
- ・奥井智久編著、『子どもと環境（理論編）』、三晃書房、(2007)
- ・榎沢良彦・入江礼子編著：『保育内容環境』、建帛社（2006）
- ・山内昭道・八並勝正編：『領域環境（三訂版）』、同文書院、(2004)
- ・無藤隆監修：『環境』、萌文書林、(2007)
- ・閣議決定：「京都議定書目標達成計画」、(2008)
- ・「環境保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」、(2003)
- ・「生物の多様性に関する条約」、条約九、(1993)

## 生物に対する好感度調査の集計表

2008年10月実施

各問いについて、選択肢の中から該当するものを選んで○印をつけてください。なお、選択肢に該当するものがない場合は、その他の欄（省略）に記述してください。

## 1 「草花」について

問1 あなたは本学に入学する前に、「草花」に対してどのような感じをもっていましたか。

ア. 好感をもっていた	イ. 好感をもつほどではなかった	ウ. 嫌悪感があった
26 (17.6%)	122 (82.4%)	0 (0%)

問2 あなたは現在、「草花」に対してどのような感じをもっていますか。

ア. 好感をもっている	イ. 好感をもつほどではない	ウ. 嫌悪感がある
98 (66.2%)	50 (33.8%)	0 (0%)

問3 あなたは、今後「草花」についての知識を増やしていきたいと思いませんか。

ア. そう思う	イ. そうは思わない	ウ. どちらともいえない
110 (74.3%)	11 (7.4%)	27 (18.2%)

問4 「草花」に親しんだり栽培したりする活動を幼児教育の場で実施する場合、あなたにとってどのようなことが課題になると思いませんか。

ア. 「草花」の観察や栽培方法についての知識や技術	イ. 「草花」を観察したり栽培したりする場所の確保など	ウ. 「草花」の観察や栽培には時間や手間がかかること	エ. 「草花」に好感をもてないこと
101 (68.7%)	14 (9.5%)	26 (17.7%)	6 (4.1%)

問5 あなたの父、母で「草花」を好きな方がおられたら、○で囲んでください。

なお、好き以外の場合や不明の場合は、その他を選択してください。

父	母	その他
12	75	67

## 2 「虫」について

問6 あなたは本学入学前、「虫」に対してどのような感じをもっていましたか。

ア. 好感をもっていた	イ. 好感をもつほどではなかった	ウ. 嫌悪感があった
5 (3.4%)	53 (35.8%)	90 (60.1%)

問7 あなたは現在、「虫」に対してどのような感じをもっていますか。

ア. 好感をもっている	イ. 好感をもつほどではない	ウ. 嫌悪感がある
18 (12.2%)	95 (64.2%)	35 (23.7%)

問8 あなたは「虫」に関することについて、今後もっと知りたいと思いませんか。

ア. そう思う	イ. そうは思わない	ウ. どちらともいえない
60 (40.5%)	36 (24.3%)	52 (35.1%)

問9 「虫」に親しむ活動を幼児教育の場で実施する場合、あなたにとってどのようなことが課題になると思いますか。

ア.「虫」の飼育方法などについての知識や技術	イ.「虫」を観察したり飼育したりする場所の確保など	ウ.「虫」の観察や世話には時間や手間がかかること	エ.「虫」に好感をもてないこと
73 (49.7%)	11 (7.5%)	21 (14.3%)	42 (28.6%)

問10 あなたの父、母で「虫」を嫌いな方がおられたら、○で囲んでください。  
なお、嫌い以外の場合や不明の場合は、その他を選択してください。

父	母	その他
5	45	102

注：アンケートは無記名で実施した。回答者は148名であったが、問いによっては無回答のものもあるので、各問の回答数は必ずしも148にはなっていない。  
なお、この集計表は、実際に行ったアンケートの様式、文言の一部を変更して作成したものである。